

厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患政策研究事業  
分担研究報告書

脊柱靱帯骨化症に関する調査研究

研究分担者 高相晶士 所属機関 北里大学医学部整形外科学 役職 教授

研究要旨

頰椎後縦靱帯骨化症 (OPLL) 術後に残存した疼痛を調査し、その危険因子について多変量解析にて検討した。OPLL 術後脊髄障害性疼痛の残存の危険因子として、高齢、罹病期間長、術前 JOA スコア不良が抽出された。本研究結果から OPLL 術後に脊髄障害性疼痛を残存させないためには、神経症状が高度になる前に手術の施行を検討すべきであると考えられた。

A. 研究目的

頰椎 OPLL は上下肢の痺れや麻痺を呈するが術後にも脊髄障害性疼痛として残存し、QOL 低下をきたす。本研究の目的は OPLL 術後に残存した疼痛を調査し、その危険因子について多変量解析にて明らかにすることである。

B. 研究方法

多施設共同前向き研究として倫理委員会承認を得た施設にて、頰椎 OPLL 手術を施行した 479 例を対象とした。胸腰椎手術、脳血管疾患など神経症状に影響を及ぼす併存症を有する患者を除外し、術後 2 年の経過観察が可能であった 292 例を対象に、患者背景、術前画像所見、手術所見、臨床所見を調査した。臨床所見は日本整形外科学会頰髄症評価質問標の上肢または体幹・下肢の痛みしびれの Visual analogue scale (VAS) を術後 2 年で評価し、VAS が 40mm 以上を残存と定義し、残存の有無による 2 群間比較ならびに多重ロジスティック回帰分析による疼痛残存の危険因子を調査した。

C. 研究結果

2 群間比較の結果、上肢の残存群は術前 JOA がスコア不良で罹病期間が長く、術式に固定手術が多く、下肢の残存群では高齢

で、術前 JOA スコアが不良であった。多変量解析による危険因子は、上肢残存が罹病期間長、術前 JOA スコア不良、下肢残存は年齢増加、術前 JOA スコア不良であった。

D. 考察、

OPLL 術後疼痛の残存の危険因子として、高齢、罹病期間長、術前 JOA スコア不良が抽出された。

E. 結論

高齢、罹病期間長、術前 JOA スコア不良は OPLL 術後残存する脊髄障害性疼痛残存の危険因子となりうるため、神経症状が高度になる前に手術の施行を検討すべきであると考えられた。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1.論文発表：Clinical spine surgery に提出中 (under review)

2.学会発表：第 50 回日本脊椎脊髄病学会発表予定 (口演にて採択)

H. 知的財産権の出願・登録状況

(予定を含む)

なし